水産科学の分野で活躍する女性たち 4

Dynamic Women@Fisheries Science 4

リストア

佐野 菜採

三重大学生物資源学部, 日本学術振興会特別研究員

NATSUMI SANO

Mie University, Faculty of Bioresources JSPS,
Restart Postdoctoral Fellow

平成4年3月東京水産大学（現、東京海洋大学）大学院博士後期課程修了後、同校で2年間、日本学術振興会（JSPS）特別研究員（PD）として、その後、1年間、教務補佐員として勤務、魚類のウイルス感染と免疫応答をテーマとして研究を続けていた。その間に第1子を出産した。子育てが少し落ち着いた頃に常勤の研究職に就ければ、などと甘い考えを持っていた。

平成7年4月に、夫の転職に伴い長崎に転居することになった。転居先でも何らかの形で研究活動を続けたいと、長崎大学で研究生をしようと思い出たやさき、9ヶ月になった息子が川崎病を患い、3週間入院、24時間付き添った。息子は、全快し、後遺症もなく済んだ。しかしこの時、我が子のことはもちろんだが、難病と闘う子供達の姿を目の当たりにしたことから、自分の夢を追うよりも、授かった子供と1分でも多くの時を過ごすべきでは、と思い始めた。先方の教授に面会の約束をしたまさにその日に入院したことで、息子からのメッセージの様な気さえしてしまった。そして、その時点で研究者への夢はいったん断念、2年後に第2子を出産し、専業主婦として育児に専念した。

その後、夫の転勤に伴い沖縄県石垣島へ転居、子供達と一緒に南の島の生き物たちと戯れ、頭の中は空っぽになっていった。5年半後、こんどは、三重県に転居した。田園風景の広がる地で、子供達と用水路で遊んでいたが、次男が小学校2年生になり、在校時間も長くなると、封印していた「研究」という夢がむずむずとしてきた。子供の在校時間内に三重大学へ行けそうだと、聴講生をして少し頭が動き出したら研究生、主婦の習い事としてはちょっと贅沢かな、などと考えながら、同期生を頼り、三重大学生物資源学部を見学させてもらった。

このとき古丸 明教授から、現在も研究テーマとしている「ムラサキイガいのmtDNAの両性遺伝」の話に興味深く聞かせていただいた。その後、研究補助員が必要になったということで、「やってみませんか」と声を掛けていただいた。研究から10年近く遠ざか

っている。また、以前行っていた研究テーマとはかなり異なる分野であり、全く知識が無い。本当にできるのか不安ではあったが、お金を払ってやろうと思っていたことが、お給料をいただいてできる。週に2日、1日6時間の勤務形態で雇用していただくことにした。実験手法を一から大学院生に習い、生殖細胞、発生といった学部生の時以来忘れていたことを勉強した。そして、10年ぶりの学会発表、論文投稿とまた研究者の卵になれた。

現在はJSPSのRPDを古丸教授のもとで行っている。このRPD制度は平成18年から実施されており、RはRestartのRである。出産、育児による研究中断後に円滑に研究現場に復帰できるように支援する制度として創設されたものである。もちろん、定員があり、選考がある。ブランクがあまりにも長いという不安はあったが、応募してみたところ、書類選考、研究計画のプレゼン審査を経て、選考された。こうして、だいぶ歳をくった“ひよっこ研究者”になれた。今後、どのような形で研究を続けられるかは、努力とチャンスしだいであろう。どんな形でも、研究活動を続けて行きたいと願っている。

この記事執筆の依頼を受けたとき、一度は断ろうと思った。私が研究者として歩んでいる道は、この企画の趣旨に合うだろうかと思ったからだ。しかし、夫が、「君みたいな人もいてくれることを知って貰うために引き受けたい」と後押ししてくれた。後進の女性達には、もし、研究活動を中断せざるを得ない状況になっても、いつか復帰できる日があることを信じて欲しい。子育てに関しては様々な考え方があろうが、専念できた期間があったことは良かったと思っている。

初めての国際学会（The 10th International Symposium on Genetics in Aquaculture, 2009）

発表ポスターの前で日本からの参加者と。左から2番目が古丸教授、4番目が筆者。